

日野の歴史と民俗131（詳細版）

壺伊勢屋事件のその後

壺伊勢屋事件とは、幕末期の慶応三年（一八六七）十二月十五日、八王子宿の「壺伊勢」こと伊勢屋に宿泊していた浪士一行を、伊豆韮山代官江川太郎左衛門手代で関東取締出役の増山健次郎らが捕縛したという事件である。増山の要請で、日野宿から佐藤彦五郎ら七人も捕縛に加わり死者まで出したため、日野の人々にとってもなじみの深い事件といえる。

事件の背景にあるのは、徳川幕府を挑発するため、薩摩藩が策謀した関東での同時挙兵計画である。伊勢屋に宿泊していたのは、甲州で挙兵する予定の一団で、リーダーは上田修理（うえだしゅり・四一歳）といった。

密偵からの報告で事前に計画を察知した増山は、同僚の鯨井俊司と共に挙兵を未然に防ぐため、日野・八王子辺の農兵を率いて、浪士のいる伊勢屋と妓楼千代住を襲撃した。

この襲撃で、日野農兵の馬場市次郎が即死、道案内の山崎兼助が重傷を負い三日後に死亡した。一方、浪士方は富田弥十郎、従僕重助が死亡したほか、植村平六郎と堀秀太郎が伊勢屋から脱出して潜伏しているところを捕縛され、浅川の河原で斬首された。上田修理と神田湊は負傷したが、加藤隼人、安田丈八郎とともに逃亡した。こうして命からがら江戸三田の薩摩藩邸に逃げ込んだ上田であるが、十日後には同所が焼討ちにあったため、上洛して京都の薩摩藩邸に入り、「務」と改名した。

しかし、年が明けると間もなく、鳥羽・伏見の戦いで旧幕府方が敗北して追討令が出され、形勢が逆転する。慶応四年三月、上田は八王子に置き去りにして没収された鎧や刀、金子などを返還し、捕縛にあたった増山と鯨井の首を差し出せと、江川家へ強硬に迫った。

江川家では金子三〇〇両をすぐ返還したが、没収した武器の所在は不明であり、また増山・鯨井とも今は江川家と関係がないと断った。だが、薩摩藩の威を借りた上田に、結局示談金千円を支払った。実は増山は以前と変わらず、韮山県の下役人となって働いていたが、「大澤克之助」と改名して難を逃れた。増山らの首を渡さなかったところに、江川家の意地を感じる。なお、この顛末は、『里正日誌』（東大和市）によってくわしく知ることができる。

大正十三年（一九二四）に出版された『三多摩政戦史料』には、上田修理をさして後の神奈川県令内海忠勝であると書かれており、これがなかば信じられて流布しているが、誤りである。内海忠勝は天保十四年（一八四三）生まれの長州人で、甲州挙兵とは関係がない。

上田は慶応四年六月、薩摩藩の伊牟田尚平（いむたしょうへい）の金策に荷担して、近江国（滋賀県）長浜の今津屋で押し込み強盗を働いて捕らえられ、伊牟田と共に翌明治二年七月、京都栗田口でさらし首の刑に処せられた。事件の口供書が「京都府史料 12」に残されており、上田の出自や最期を知ることができる。また、今津屋の強盗事件には、壺伊勢屋にいた安田丈八郎も上田と行動を共にして捕らえられ、牢内で死亡している。

（日野市郷土資料館 矢口祥有里）

※広報ひの（平成 23 年 4 月 15 日号）にダイジェスト版が掲載されています。

日野市郷土資料館（042-592-0981）